

房総の歴史と下総台地の開拓：メコンデルタ開拓との比較から（3）

[千葉県成田市三里塚周辺地域の社会的・文化的特性に関する実証的研究]

高 田 洋 子

目 次

はじめに

1. 千葉県及び下総地方の開拓
- 1) 房総の風土と歴史
- 2) 千葉県の誕生と明治政府の下総台地開墾事業
- 3) 三里塚と御料牧場 以上第8号掲載

Ⅱ. 入植と開墾の歴史比較

(A) 下総地方の開墾過程

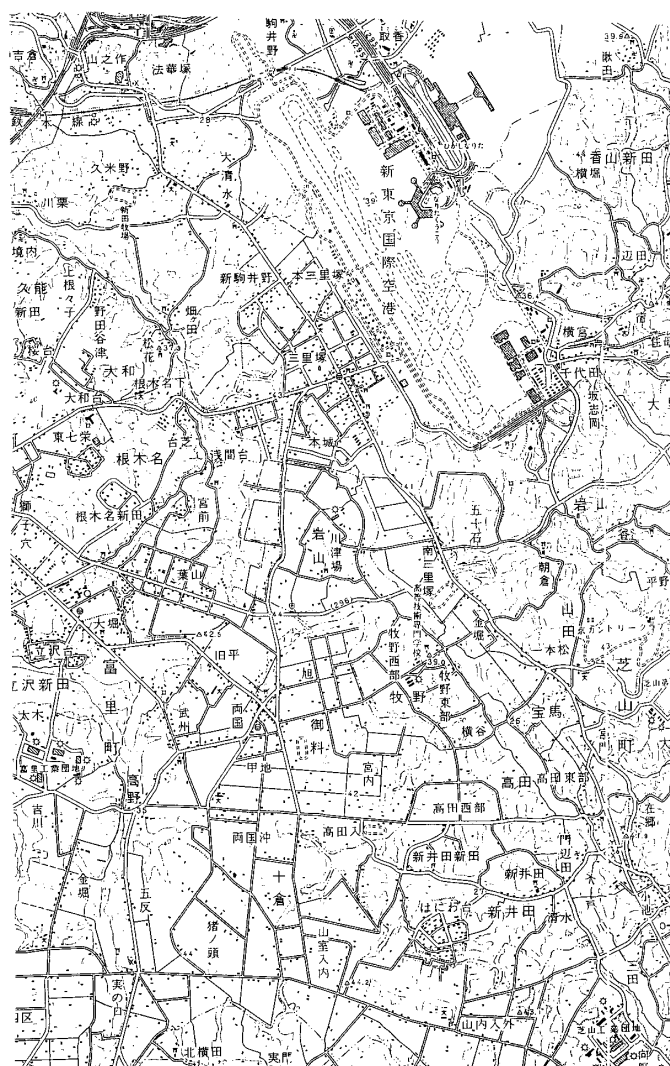
- 1) 富里村の周辺
- a. 開墾の自然環境
- b. 歴史環境
- 〈近世以前〉
- 〈近世の野付村と検地〉
- 〈近世の新田開発〉
- 〈農村社会の秩序と階層分化〉
- 2) 近世初期の開墾：七栄・十倉
- a. 入植事業の開始
- b. 七栄村の開墾 以上第11号掲載
- c. 十倉村の開墾
- 〈移住者の3タイプ〉
- 〈開墾状況〉

(B) 近世初期の開拓をめぐる比較考察： 下総台地とメコンデルタ

- 1) 新しい開拓社会の形成
- a. 開拓と自然環境
- b. 開発政策の背景と帰農政策の失敗
- 2) 開拓地の集村形態
- a. 集合型と分散型
- b. 開拓村と母村 以上本号掲載

c. 十倉村の開墾

〈移住者の3タイプ〉



1000m
1:50,000地形図

第1図 現在の十倉地区周辺

富里村史年表に依れば、旧佐倉 7 牧の一つであった高野牧（こうやまき）一帯に東京から最初の入植者が到着したのは、明治 3 年（1870）11 月のことであった。東京からの移住者は、その後も到着した。同年 12 月には、埼玉県入間郡からの開墾志願の集団が入植してきた。これに加えて翌年には、小金牧の開墾地としてすでに成立していた五香六実村と初富村から、再移住者が流入した。これら複数の経路からの開拓民の入植によって、明治 5 年（1872）には十倉村が誕生した。新十倉村は、明治政府による下総台地開拓の 10 番目の開拓村となった。十倉の開墾史には、後述するように埼玉出身の農民達の存在が重要な意味を持つ。

〔東京移民〕 東京から十倉へ入植した人々は、1870 年 11 月 4 日夕方に舟に乗り、隅田川を下って翌朝行徳に上陸、市川・中山・船橋を陸路で進み、臼井に宿泊。翌日佐倉、酒々井、新橋、立沢、高松を過ぎて高野牧に着いた。13 世帯 45 人の一行であった。その後 1871 年の 4 月 19 日までに数回に渡り、合計 50 世帯 165 人が移住した（「高野牧人員送調帳」）⁽¹⁾。

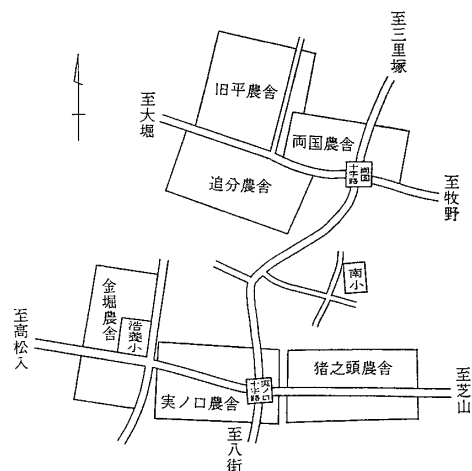
また五香・六実からの開拓民 2 世帯 5 人は、火災による被災者として 1871 年 2 月に十倉に移住した。さらに同年 7 月 7 日に発生した暴風雨によって壊滅的被害⁽²⁾を受けた初富の開拓民も、9 月にここに到着した。初富からの移住は 50 家族 177 人であったとされる。以上を合わせて、東京出身の入植者は、当初の 2 年間に全体で 102 世帯 347 人であった（「旧高野牧移民下調書」）⁽³⁾。

このように東京移民 102 世帯のうち、48 %が東京から直接十倉に来た人々であり、それを上回る 52 %の人々は初期の開拓地からの移転者であった。下総開墾事業の第 1 号、初富への入植は 1869 年 10

月以降のことであるから、ほんの数年のうちに入植地からの移動を余儀なくされた人々が多くいたことがわかる。加えて東京から十倉に第 1 陣として直接に入植した人々には、わずか数ヶ月で出奔した例が目立つ。1871 年 5 月までの出奔者数は、東京移民総数の 2 割ではあるが、第 1 陣だけで見れば 13 世帯のうち 5 世帯にのぼっている⁽⁴⁾。

東京移民は、開墾会社が用意していた 6 箇所の農舎に入居した。当時の農舎は、それぞれ猪之頭、実ノ口、金堀、両国、旧平、追分という名が付けられた（第 2 図を参照）。「追分」を除いて、現在も三里塚から南に約六キロ付近を中心に、東西約 2.5 キロ、南北約 3.5 キロの台地上（標高約 30m）に子字名として残っている。明治 10 年に参謀本部が調査作成した迅速図（神田文人本学元教授提供）を用いて同付近を確かめると、「上総国武射郡岩山村」とある。それは三里塚競馬場の南になる。また高崎川の支流の上流に立澤・高野がみえ、その東側となる一方、また木戸川上流右岸の岩山新田の西南あたりとなる。一帯は原生の柴栗の林があるばかりで、茅の生い茂る一面の原野であった⁽⁵⁾。

村史に印刷された農舎ごとの入植月日の記録か



第 2 図 農舎位置概略図

出所：村史 705 ページ

房総の歴史と下総台地の開拓：メコンデルタ開拓との比較から（３）

ら判断すると、東京から直接に移住した第１陣は実ノ口農舎と金堀農舎（十倉の西側）に、初富からの開拓者は猪之頭農舎と旧平農舎そして両国農舎（十倉の東側）に、分散して落ち着いた。また追分農舎には五香六実をはじめ、東京からの第２陣と第３陣の入植者が混入して住んでいた。

先の入植世帯数と入植者数から単純計算すると、一世帯当たりの家族数は三人から四人弱となる。農舎の各部屋の図面によれば、一世帯ごとの部屋は３間×３間、内部は六畳と半畳の板の間付き、それに八畳ほどの土間がついていた⁽⁶⁾。

〔埼玉移民〕 東京移民の入植地の間に挟まれた旧高野牧三野久保に、東京移民の第一陣と同じく明治３年（１８７０）に、武蔵国入間郡南入曽村（現埼玉県所沢北部、武蔵野台地北東部）から、開拓志願の人々が入植した。現在も十倉に地名を留める武州開拓民である。八街から十倉の一带には、明治期に端を発し、その後も大正、昭和と次々に入植した埼玉移民の開拓地が存在する⁽⁷⁾。

明治期の十倉開拓のパイオニアである栗原貫三は、明治３年頃織物行商に來た時に、開墾会社の社員であった榎本六兵衛（十倉の引受社員）から、入植の勧誘を受けた。帰省後すぐに同志数人を募って移住したが、土地の所有は認められず、ひとまず帰省した。しかし貫三の子である恒次郎が再び４０人の農民とともに定着して、富里開墾の先駆集団となった⁽⁸⁾。埼玉からの入植者世帯は、明治４年２月に１４戸、３月に５戸、４月に１０戸、８月に１戸、そして明治５年に４戸、さらに明治６年（１８７３）２月までに４戸というように増えていき、３８世帯１２０人の人々が集団開墾を開始した⁽⁹⁾。埼玉移民が入植した「高野牧三野久保」は、以後小字名を「栗原」と呼ばれるようになった。この集

落は、明治初年の入植以来ほとんど脱落者を見ずに存続したのである。

〔近隣移住民〕 明治３年から８年（１８７５）までの間に、近隣の立沢村と高野村から大堀に入植した近隣の人々の記録も、断片的ではあるが、存在する。大堀地区は旧平から東に約１．５km、埼玉移民の入植地武州からは北西３．７kmあたり、明治１４年（１８８１）までに２０戸を数えた。後述するように、東京移住民が出奔した跡地を近隣の農民達が引き継ぐ形で、開墾はじわじわと進んでいったのである。

<開墾状況>

十倉の東京移民には、七栄と同様に開墾の条件に記された住居と農具が現物で貸与された⁽¹⁰⁾。住居は先の農舎であり、また農具は、唐鋤、鎌、鉋、万能鋤・作鋤が一丁づつ、そして砥石１個、肥溜め桶１個、肥担桶一荷であった。その上、一人前の稼ぎ人として扱われた１４才以上５９才までの男女に、３年間、白米、塩、みそ代などの食費として一人百文と、手作地５反歩と家宅地５畝が分配された⁽¹¹⁾。ところが、早くも明治４年（１８７１）１０月には、開墾会社の資金繰りの苦境によって、食糧費の貸し金は打ち切られた⁽¹²⁾。これが、先述の５２名にのぼる逃亡者を出した直接の要因であった。

東京移民の女性達の苦労は並大抵ではなかっただろうが、初期の時点での出奔者は出ていない。たいていは未亡人であり（３８、４８、３７、４６、５５歳）、１人～２・３人の子持ちであった。子供の歳は４歳～８歳、１０歳～１６歳。最初の仕事は、男女ともに農舎ごとの持ち場を決めた道路づくりであった。道幅は四間、左右の溝は巾三尺、深さ二尺に掘り上げられた。それらの賃金は男女同賃金で、坪当



写真 1 十倉地区の農家、スクリンブラー灌水
(筆者撮影 2004年4月)



写真 2 十倉地区南部の湧水
(筆者撮影 2004年4月)

たり銀三分であった。

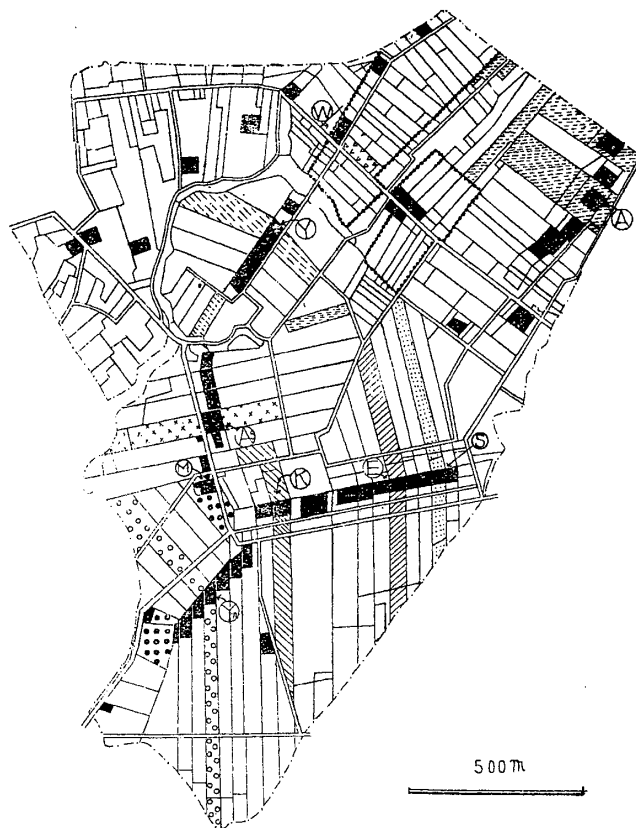
東京移民の第 1 陣の入植から数ヶ月後、明治 4 年 (1871) 1 月の開墾地面積は 8 町 5 反歩である。開墾したての土地に夏作の陸稲、粟、いも類、大豆、小豆、麦を植えたが、同年 7 月 9 日には早くも台風が襲来し、被害を出した。また例年、春先は赤い風の季節で、西よりの季節風が細かな粒子の火山灰土を吹き上げた。勿論、入植したばかりで防風林も無かった。3 年に 1 度は日照りの危険に見舞われた。早速、明治 6 年は干ばつの年となった⁽¹³⁾。

村史に依れば、明治 5 年末の十倉において一戸当たり開墾面積は平均 3 反歩程度であった⁽¹⁴⁾。昭和 34～5 年 (1959 - 60) 頃の同地の陸稲生産は、肥培管理のもとでも反当り 3 俵、明治期の灰と糠

しか施せなかった新開地では、おそらくせいぜいこの半分の収穫しか期待できないと考えられる。明治 6 年の干ばつ年は、「半作」と記されている。これでは食米が不足したのは当然である。人々は明治 7 年 3 月に嘆願書を提出して貸米の提供を旧会社懇願したのである⁽¹⁵⁾。

栗原貫三の明治 7 年 1 月末の記録に依れば、240 戸あった七栄村ではすでに 40 戸しか残らなかった。十倉村は 96 戸が 41 戸に減少し、開拓者数は 355 人から 118 人になった。入植した東京移民は、わずか 3 年半の間に、世帯数は四分の一に、人数は三分の一にまで激減していたという⁽¹⁶⁾。

これに対して武蔵国出身の次男三男達による武州地区の開墾は、明治 5 年 9 月に 28 町歩の土地を開いて大麦と小麦を植え付けた。翌 6 年にはこれ



第 3 図 武州地割と所有形態

(註) 点線枠内は明治 35 年現在の 5 反 5 畝割地区、すなわち東京窮民への割渡地区である。

出所：白浜論文、41 ページ

房総の歴史と下総台地の開拓：メコンデルタ開拓との比較から（3）

を34町歩に拡大して、大豆・小豆・裸麦・粟・里芋・甘蔗・野菜類を栽培した⁽¹⁷⁾。さらに、干ばつと風害の地に安定した生産を確立するには製茶と養蚕をとり入れる必要があると、会社に申し入れをした。後述するように、出身地で栽培されていた茶木と桑木栽培の導入を提案したのである。会社はこれを受け入れて、明治6年4月に桑苗2000本を貸し付けた。その後十倉は明治中期から昭和初期まで、製茶と養蚕が盛んな地として知られるようになった。とりわけ製茶は、現金収入を得ることができる、無くてはならない産業となった。開墾地の「空師とお茶師は二人手間」ということばは、その当時を偲ばせる。茶木の枝打ち職人である空師と製茶の技術に長けた人は、人の2倍の手間賃を稼いだのである⁽¹⁸⁾。

B) 近代初期の開拓をめぐる比較考察：下総台地とメコンデルタ

本研究の第一論文⁽¹⁹⁾の冒頭で記したように、筆者は、例え地理上の位置は全く異なっているとしても、下総台地とメコンデルタのフロンティアにおける開墾・入植に際して人々が投入した時間と労力、その結果生まれてくる開拓社会のかたちと問題のあり方を比較すれば、そこには共通のテーマや普遍的な性格あるいはそれぞれの特徴が浮かび上がるのではないかと考えた。以下では、富里に関する行論と筆者がこれまで取り組んできたメコンデルタ開拓史の諸問題を素材として、その比較を試みることにしたい。

1) 新しい開拓社会の形成

a. 開発と自然環境

メコンデルタと下総台地の開拓に共通するのは、両者に長い間人間にとって開発不可能と見なされていた厳しい自然環境が存在していたこと、そして、それらが19世紀後半から20世紀にかけて、アジアにもたらされたヨーロッパからの「近代」の影響下で、大規模に、かつ急激に改造されたという点である。

東南アジア大陸部のインドシナ半島を貫通するメコン川は、遙かチベットから流域6カ国を流れ下る4000kmの大河である。大河が南シナ海に注ぐデルタ地帯は、カンボジアのコンポンチャムあたりから始まって、平均標高2メートル以下の低平地であり、その総面積は約600万ヘクタールに及ぶ。そのほとんどは、人間の制御が及びにくい、スケールの大きな自然環境に支配されていた。インドシナはモンスーン気候に属し、1年は雨季と乾季に分かれる。雨季のメコン川の洪水は、デルタの比較的上流域では川沿いの後背地を一面の浸水地帯に変える。そのような地域の排水不良の凹地は硫酸酸性塩土壌となって、作物の生育を制約した。乾季には、デルタの景観は一変する。メコン川の水の届かない奥地は干上がり、沿岸部は潮汐運動に伴って海水による土壌汚染が進む。従来、人間の居住は浸水を免れるデルタの微高地上に限られ、環境適応型の農業が営まれていた⁽²⁰⁾。

そのような環境適応型の稲作は、先住民族クメール人の得意とするところであったが、今ひとつ、メコンデルタの中流地域には、水田立地に比較的良好な自然条件が存在していた。17世紀末に入植した華人や19世紀以降にしだいに増加したベトナム

ム人達が、そうした地域の開拓を進めた。メコン川はデルタの中流域（新デルタと呼ばれる）でいくつもの支流に分かれ、その流域の浸水過程は緩慢なものになる。ここでは、新参のひとびとが小規模なモザイク状の掘割りづくりに専念して、盛土の上に居住し、堀の水を作物の灌水に利用しながら、低平な大地をすこしずつ改造することができたのである⁽²¹⁾。

しかし、ベトナム領メコンデルタ西部地域に残された人跡未踏の大自然が「開拓地」に変わるのは 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけてである。その契機は、このころフランス植民地政府が浸水地の排水機能を兼ねた幹線大運河をいくつも掘削し、輸出米の増産に向けて、自然環境の大規模な改造を開始したことにある。その後、密林や葦に覆われていたメコンデルタ西部の運河沿いに、稲作中心の開拓社会が誕生した。ベトナム領メコンデルタの水田面積は 19 世紀末から 20 世紀初頭のわずか 30 年間に倍増し、200 万ヘクタールを越えた。それ以降、メコンデルタの農業は工学的適応⁽²²⁾を基盤とするものに画期的に変化したと考えてよい⁽²³⁾。

一方の下総台地にも似たような事情が存在した。下総台地は、地質学的には、海底で形成された成田層が隆起して陸化した上に、火山灰が降って関東ローム層が形成された。その標高 30m ほどの広野原を、勾配の少ない小河川が台地を浸蝕しながら低地に向かって流れる。拙稿第 2 論文で述べたように、下総台地の北端に位置する富里地域は、利根川の氾濫原低湿地とこれらの台地から構成され、全体としては島嶼的自然環境を有した。

台地部の無数の幼年谷には小規模な谷津田の開発がすすみ、小河川流域の低地部に水田農業が発

達した。それは長い歴史社会をはぐくみ、古墳の誕生や中世の古村を成立させた。江戸時代にいたると、当時の技術水準の下で、低地部の開発はほとんど飽和状態に達していた。

しかしながら、低地水田地帯と比べて下総台地縁辺から台地上への開発は極めて困難で、享保期の開拓で生まれた畑作新田の生産性は低いものでしかなかった。その要因は何より下総台地の厳しい自然環境にあった。年間の平均気温は 14 度、降雨量は 1400mm の寡雨地帯で、冬から春にかけて吹く北西の季節風が一带に風害をもたらした。表土は黒土だが透水性が高く、水不足は決定的で開田は無理だった。樹木はクヌギなどが点在する程度であり、台地は奥地に行けば行くほど、人間の居住空間から残されてきた。結局、茫々とした台地は幕府の「天領」に組み込まれ、独占的牧場として馬の放牧や鷹狩りなどに利用されたのである。

ところが、明治維新が始まるやいなや、下総台地は天領を受け継いだ明治政府の国有地に編入され、大規模開発の対象地が変わった。明治政府は、開発資金を補助金貸与と旧江戸の投資家に依存しながら、積極的に労働力の斡旋事業を開始した。フランス植民地政府がメコンデルタ西部の無主地を国有地とし、運河の開削によって創出した可耕地を近代法の下で申請者に分配して開発を促進したように、明治政府は下総台地の開発のための道筋を用意した。つまり開拓民の入植制度と、官有地を得て開墾を進める開墾会社の設立を認可したのである。両者の開発は、どちらも個々の人間の開拓にとっては厳しい自然環境を、新しい国家権力のイニシアチブの下で推し進めようとした点に共通性がみられる。

房総の歴史と下総台地の開拓：メコンデルタ開拓との比較から（3）

b. 開発政策の背景と帰農政策の失敗

このように、誕生したばかりの明治政府と仏領インドシナ連邦政府の開発計画は、その後の下総台地とメコンデルタにおける開発の契機となったが、開発が要請された社会経済的背景について、次に比較検討する。

明治政府の下総台地開発政策の目的については、3つの異なる見解が存在した。すでに明らかにしたように、（1）開墾事業は失業した東京窮民の救済事業であった、（2）維新に際して東京府内に生じた社会不安の源である遊民・窮民を東京から排除する施策であった、また（3）荒蕪地の耕地化という殖産政策であった、とする見方である⁽²⁴⁾。

二世紀半ば以上続いた旧体制の崩壊と新体制の確立が同時進行していた激動の頃、北海道の統治開発と並んで、この下総台地の「開墾事業」は計画された。近代日本の曙に際し首都「東京」が建設される大きな転換期に、失職した旧武士階級やその奉公人、下層町人、そして都市に流入した無籍・無産民を速やかに東京から移動させること、それこそが新生政府の急務であったように思われる。同時に彼らをして無人の野の開墾にあたらせるのは一石二鳥の施策のはずだった。

しかし、七栄と十倉に入植した東京移民の状況をみてきたように、実際には、開拓開始直後から離脱者は後を絶たなかった。全体として入植者の8割から9割は離散したのであった。明治6年(1873)4月に房総地方を視察したフランス人ブスケ⁽²²⁾は、「政府は、役人の妻子とともに、あらゆる浮浪者・露天商・乞食、一言で言うなら江戸に集まった食いつめた者達を、合意の上で、あるいは強制的に連れてきて、小屋や耕地を与えた。・・再び転落する危険があっても、彼らは継続的な仕事に束縛さ

れるより都会で浮浪生活をする方が一層好きなのだ。従ってお役所的なこの町（八街）はほとんど無人となっており、大部分の小屋は見捨てられている。この試みは失敗だった。」と記している（ブスケ『日本見聞記1』）。開墾を請け負った会社そのものが、設立からわずか3年で解散してしまったのであった。

他方、メコンデルタ西部における新田開発の背景には、ベトナム・ラオス・カンボジアを含めた仏領インドシナ連邦成立後、本格的な植民地連邦経営の開始と同時に生じたインドシナ貿易の赤字問題があった。連邦政府の首都機能を持ったハノイの建設、インドシナ開発のためのインフラ整備、それらの資材は本国フランスから大量に輸入された。メコンデルタ西部の大規模開発は、インドシナ連邦政府がインドシナ貿易の赤字を構造的に解決するための輸出米増産にそのねらいがあったのである。それは、フランス植民地経営のあらたな段階を支える必要上から要請されたものといえる⁽²⁶⁾。

開発当初のメコンデルタ西部には、労働力不足問題が深刻だった。植民地政府は、開墾に従事する人々を、人口稠密なベトナム北部の紅河デルタ農村から調達することを計画した。北部のフランス理事官府が、1908年に入植志願者84世帯328人をメコンデルタのカントー省フンヒエップ村に斡旋したことがある。最低3年間の契約で、1戸当たり土地を4ヘクタールずつ分配し、開発5年後には土地所有者となることが約束された。その期間は地税と人頭税を免除し、収穫を得るまでの間は植民局が前貸し金、食糧、衣類、農具、日用品の他、住居も提供した。しかし、この試みは失敗した。入植からわずか5ヶ月間に逃亡・離脱した人々が続出した。その理由はこれらの移住者のう

ち実際の農民はわずかで、ほとんどが出身地で浮浪者であったか、村の正規の成員ではない者達であったからである⁽²⁴⁾。植民地期を通して幾度も試みられたメコンデルタへの労働力投入政策は、結局、実りある結果を得るには至らなかった。開発のための真の労働力は、比較的近隣のメコンデルタ東部・中部からの労働移動、ないしは入植で調達されたのである。

2つの事例を通して確認すべきことは、政府のこれら大規模開発政策の遂行目的は、根本的には国家それ自体の存立と発展を目的としている点である。また政府による開発労働力投入施策の難しさ、そこに孕まれた問題性である。

2) 開拓地の集村形態

a. 集合型と分散型

開発政策を通して発生する国家と農民の関係性と並んで、開拓における個と集団性の問題も重要な論点であるように思われる。人文地理学の分野では、集落の形態に関して集合型と分散型をめぐる議論がある。「佐倉牧跡における集落の形成過程」と題した白浜兵三の論考を基に、富里の開拓集落に関する地理学者の分析を紹介する。白浜によれば、「東総地方には、台地上に散在する点状集落と、樹枝状沖積谷に臨む斜面、もしくは小台地上に存在する大小の塊状集落が対象をなす。」しかしこれらに対して、「明瞭な直線状の集落が、比較的広い台地面上の散居地域の中に介在することも見のがすことができない。」⁽²⁸⁾その例として富里地域の武州、旧平、高松入り・・・が挙げられているが、「これらのうち、富里村の武州、高松入り、双葉は片側路村であって、形態上は線状集落から区別され

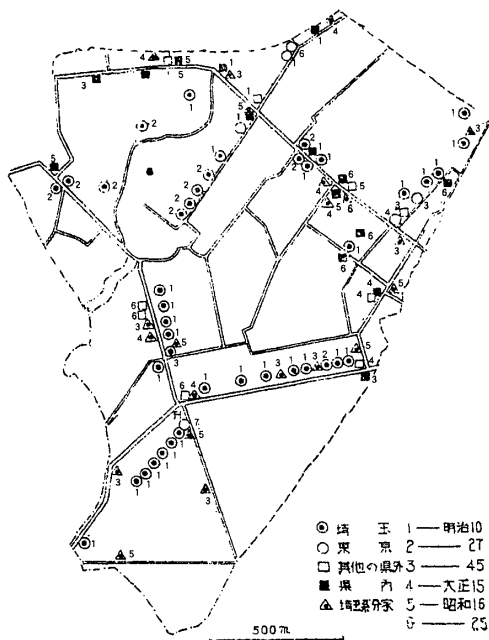
る。」⁽²⁹⁾。集落形態は、村落の形成過程のみならず、その後の村落生活の展開、農業生産力の発展に何かしらの関係を持つというのが白浜の問題意識である。

七栄の場合、当該時期の入植第1波の開拓は、開墾会社が解散した時点で予定面積の三分の一に達していなかった。そして、東京からの開拓民の8割は明治16年(1883)までに脱村しており、最初の開拓者集落は一旦は崩壊した⁽³⁰⁾。その後、跡地は近隣村の富裕農民によって不在所有された。そのような土地は近在の農民達が次第に、またそれぞれに買い取って住居を建て、宅地周りを開墾した。その結果、七栄地域の集落形態は分散型となった⁽³¹⁾。しかもこのような地区では、分家が行われる場合、本家と分家の家宅を隣接させるのではなく、家宅と耕地の接続をむしろ重視する傾向がある。先の地主の不在所有地を買い取ったり、借地しながら、分散的集落の形態と性格は保持されたのである⁽³²⁾。

続いて白浜が注目したのは、先の武州地区の直線状路村であった。その集村形態は、明らかに七栄の分散型に対して、集合型である。武州地区は先述のように埼玉移民の入植地である。白浜は明治35年(1902)の当該地域の土地台帳の記載を調べて、武州地区の集落は稻荷神社付近を中心として3方向に放射していたこと、しかしそこには七栄の例に見られたように5反の耕地と5畝の家作地が別々の場所にあるのではなく、方形の宅地と短冊形の耕地山林地がそれぞれの農家でセットになっており、それらが整然と道路の片側に並んでいたことを指摘している。

その上で、彼は、このように特徴ある土地割りは開墾会社社員でなく、移住者たちが自らか、あ

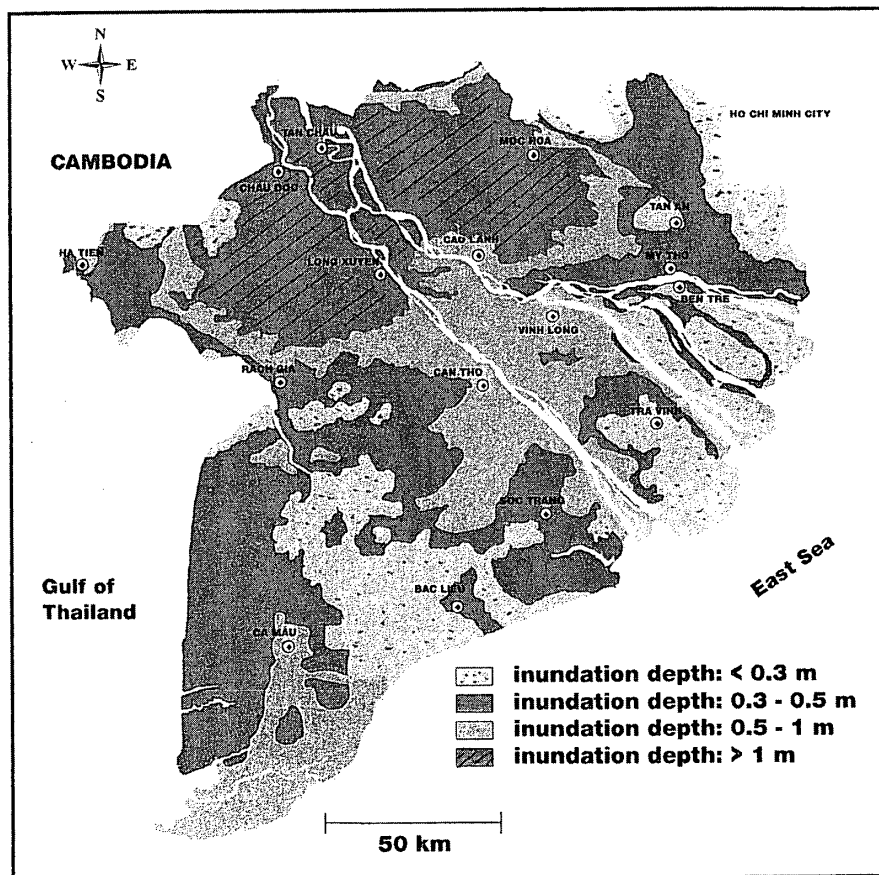
房総の歴史と下総台地の開拓：メコンデルタ開拓との比較から（3）



第4図 武州出身地と移住分家年代
出所：白浜論文、42ページ

るいは参与して獲得したものと推定している。そしてこのような「地割形態、道路、宅地、山林、耕地の配列は、元禄年中新開の武蔵国三富の場合と酷似している」と述べ、「武州部落の出身が三富近傍であることや、同じ土地の出身者から構成される・高松入りの土地割りが先着の武州部落民鈴木仙吉等によって同一手法で行われていることからみて、故地の集落形態を移植したことは疑うことができない。」と結論づけている⁽³³⁾。この重要な指摘については次節でさらに考察を深めることにして、ここでは先の七栄の分散型集落の場合と同様に、武州の集合型集落の分家の形態に触れておく。

彼らは分家に当たっては、内部で耕地を分け



第5図 メコンデルタ浸水深図

Vo-Tong Xuang, Shigeo Matsui, *Development of Farming Systems in the Mekong Delta of Vietnam*, Ho Chi Minh, 1988, p.28

るより、むしろ多くの場合、集落外に新開拓地を求め、遠近を問わず派出させた。十倉村では、下総牧場が逐次土地を開放して民間人に払い下げていたので、彼らはそれを求めて進出し得たのだという。そのような分家のありようが、七栄の事例と同様に、母村集落の原型維持に何らかの貢献をしたことは確かだと思われる。

一般に、メコンデルタ西部の運河に沿って家宅が並ぶ新開地の村落はリボン状村落と名付けられる。それは、ベトナム民族（キン Kinh）の揺籃の地である北部ベトナムの紅河デルタに典型的にみられる集合型の集落形態（輪中のなかの水田地帯に浮かぶように立地し、村の内と外を区別する竹垣に囲われた塊状村落）や、中部ベトナムに点在する小規模な海岸平野に見られる集村とは極めて異なる。メコンデルタの新開地では運河を掘削した土を両岸に盛り土した上に、入植者は隣との間隔を充分にとってニッパヤシの家を造る。運河は新田の排水と取水路、移動の交通路、重要なタンパク源を採取する漁場、そして飲み水や生活用水を確保するために大切である。それは生活空間そのものであって、運河とともに人々の生活が成立している。

筆者は、メコンデルタ西部の運河沿いの集落調査を 1996 年から 98 年にかけて実施し、このようなメコンデルタ新開拓地の社会を、「運河社会」と呼んだ⁽³⁴⁾。そこでは、水の管理と農民生活が、北部ベトナムのように、村落を不可欠の基本単位として共同性を帯びることはほとんど必要ない。一旦運河が開削されれば、基本的に稲作は天水に頼り、運河沿いに並んだ数ヘクタール規模の水田稲作は、家族を単位として粗放的に個別的に営む傾向が強い。農繁期の田植えと刈り取りは、運河を

使って自由に移動する農民の賃金労働に依存した。フランス植民地時代から小作人の多いメコンデルタは流動性の高い社会であり、家族の絆は強いが農家の独立性は比較的高く、村や集落の実態としての存在は希薄であった。その証拠に、行政村 Xa や集落 Ap の境界線はきわめて曖昧だった。

現在でもデルタ西部の運河社会には、伝統的なベトナム民族の「竹垣に縁取られた閉鎖的な村空間」や「外部と内部を区分する村の入り口（守護門）」を見ることはなく、むしろ水路に沿って一列に並ぶ農家はそれぞれに柵を設け、一都海の敷地内で犬を放し飼いにして防犯対策としているのが一般的である。メコンデルタ西部の集村形態は、農家の独立性が高い分散型集落と言える。

b. 開拓村と母村

明治初期の七栄村や十倉村における東京移民の多くが土地から離脱するなかで、すでに何度も触れたように、十倉村における埼玉移民の定着性は際立っていた。先に紹介した白浜論文では、明治期の武州地区の地割と集村形態を検討して、開拓地の人々が故郷の集落形態を入植地に移植したと論じられていた⁽³⁵⁾。開拓民の定着性と母村との関係を武州の例からさらに考察したい。

通常、集合型の集落形態が開拓地において集団的共同性を創出したり、また団結性を発揮する可能性は、分散型のそれと比較して高いように思われる。実際、白浜論文が執筆された 1950 年代前半、聞き取り調査において、武州人が近隣住民から「団結性」と「郷党意識」と「営農力」にたけていると評されていたことを、白浜は書き残している⁽³⁶⁾。さらに、彼ら開拓民と出身村との緊密な関係は、入植後も縁組みを故郷の村に求め、それを通して

房総の歴史と下総台地の開拓：メコンデルタ開拓との比較から（3）

相互の交渉を保ってきた点などに明かであったという。

また、埼玉の郷里から縁故者を呼び、集団移住を先導したことも開拓村と母村の強い関係性を表している。明治14年（1881）に下総種畜場の一部が開放された時、「実の口地区」100町歩の土地を取得して、新たに埼玉移民の「五反集落」が生まれていた。続いて明治18年（1885）にも、「高松入り集落」が同様に誕生した。ここでも、農家が道路の北側に一直線状に並び、みごとな路村をなしていたという。先着の武州集落の農民が行ったとされるこの土地割りは、各自所有の短冊型耕地と宅地を含み、やはり道路に対して直角に配置されていたのである⁽³⁷⁾。

栗原貫三の故郷であった南入曽村とその近傍の三芳町は、武蔵野台地の北東部に位置する。現在は狭山市の南から所沢市の北東に隣接する地区である。三芳町は、元禄7年（1694）、川越藩主（五代將軍綱吉の側御用人であった）保明が家臣の曾根権太夫らに命じて開発させたという三富新田の名で有名である。もとは台地の入会秣場であった武蔵野原野に、近村の農民を入植させ、1696年の検地に上富、中富、下富の三か村を立村したと伝えられている。基盤の目の道路とそれに面した住居、その奥に畑地が短冊形に区画された畑作新田。その地割景観は、今も三富開拓地割遺跡として埼玉県指定の旧跡となっている⁽³⁸⁾。1軒分の短冊状所持地の面積は当時5町で、屋敷林、畑作耕地、雑木林によって整然と構成された。周囲には入植農民の菩提寺として開山された上富村の「多福寺」と中富村の毘沙門天社があり、村民の精神的支柱であったという⁽³⁹⁾。周囲は現在、すっかり都市化した。明治期の主産業は農業であり、麦類・甘

蔗・茶・繭を生産した。西側の狭山丘陵は全国的に知られたお茶の産地である。

明治初期に下総台地の開拓に向かったこの地の人々が、故村創始の歴史を知らなかったはずがない。彼らの開墾志願には、武蔵野台地を切り開いた祖先の意志が宿り、そのために入植先にも三富の地割と直線路村型の集落を形成したことは容易に推察される。また乾燥に強い茶木の植樹や桑木の栽培を彼らが開墾会社に提案したのも、武蔵野台地の開拓過程で積み重ねられ、蓄積された農民の経験が、下総台地の類似の自然環境下で適応再生された結果だったのであろう。開拓が成功する要素を考える上で、興味深い問題を提起しているように思われる。

次に、メコンデルタの開拓社会と母村との関係に移ろう。19世紀に南北ベトナムを統一したグエン朝政府は、バサック川（現メコンの分流 Hau Giang）以西の進出にあたって、屯田制 Dong Dien の下の開拓を推し進めようとした。志願者は Doi（隊）と呼ぶいわば開拓軍団に属して、一つの村を形成した。平時は開墾・耕作に、また一旦急あれば兵卒に身を挺した。バサック川下流域および以西には、先住民クメール（Khmer, カンボジア人のこと）の集落が点在し、彼らの抵抗に備える目的があったからだ⁽⁴⁰⁾。

フランス時代にはいるとすぐにも屯田制は解体された。しかし、例えばメコンデルタ西部で村名に Thoi の多く付く地区（＝ O Mon・Can Tho 周辺）は、ベト族による19世紀半ばの屯田に起源を有する開拓社会である⁽⁴¹⁾。また新しい村設立の手続きは、フランス時代も基本的に継承された。入植者のグループが村創設の許可を官吏に申請すると、成年男子の戸籍簿への登録、私田と公田および村有田

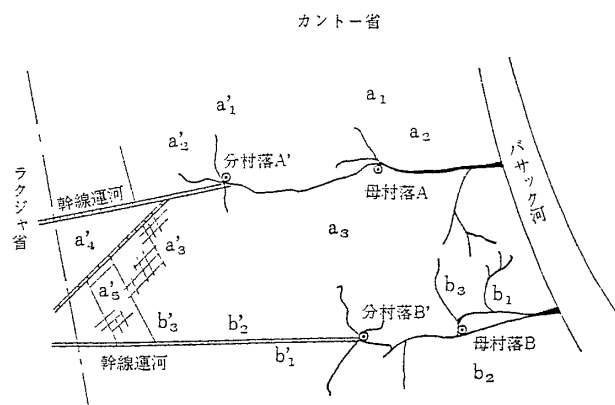
などの地簿への記載、徴税に対する取り決めがなされなければならない⁽⁴²⁾。1870年代には、官報誌上に新村設立の許可令が多く見られ、開拓のためにメコンデルタ東部から中部へ人々が移動するさまが同じく植民地政府の公史料に散見されるようになる。

やがて 1890 年前後から、フランス植民地政府はベトナム南部の地方行政機構の整備に乗り出す。地方統治の最末端単位である行政村 Xa の区画を確定し、自治機能を持った村の有力者層の中からその代表者を明示させ、さらにいくつかの Xa を束ねる上級の統治レベルである総 Tong の責任者を選出させた⁽⁴³⁾。

筆者は 1920 年代に作成されたメコンデルタの地図（十万分の一）を基に、デルタの新開地における地名群落を詳細に分析して開拓社会の形成過程に関する仮説を提示したことがある⁽⁴⁴⁾。この仮説はその後、19 世紀前半の地簿を分析した歴史研究の文献⁽⁴⁵⁾から、また 1997 年に筆者が実施した臨地調査を経てますます確信を強めることができた。

ベトナム南部の地名は、通常は 2 つの漢字の組み合わせから成っている。新しい村が生まれるとき、その新村は母村の地名の漢字一つを残して、別の漢字を組み合わせで命名されることが普通で、その時に一定の慣習がある⁽⁴⁶⁾。たとえば、Thoi Thanh 村から分かれ出て Thoi An, Thoi Lai・・・また単に、一つの漢字を共通にしながら、東 Dong、西 Tay、上 Thuong、中 Trung、下 Ha を付けて、Thoi Dong, Thoi Tay, Thoi Thuong・・・というように。これを手掛かりに、開拓村が生まれてくる過程と母村の関係を類推することができる。

第 6 図は、バサック河（メコンの分流）右岸の支流（O Mon 川）を遡って、母村落 A 村から派生



第 6 図 開発過程を示す開拓部落の地名群落のモデル
母村落 A, A 村の部落 a_{1-5} , A 村の分村落 A', A' 村の部落 a'_{1-5}
B, b, B', b' は A, a, A', a' に準じる

したと考えられる分村落 A' 村、そしてそこを起点にデルタの奥地に掘削されていく運河とそれに沿って散在する複数の A' 集落 ($Ap A'$) の配置を模式的に示している。A' 村 ($Xa A'$) はこれら A' 集落群から構成されている⁽⁴⁷⁾。

地図上の分析に加えて、臨地調査の成果から、筆者はこのようなメコンデルタ西部の開拓社会の実態を次のように捉える。開拓村 A' において、まずはじめにここに入植した開拓民は、自然河川流域の微高地に立地した村落 A (元は先住民族クメール人の村であったり、ベトナム人の旧屯田村である) を母村とする人々であった。彼らは、フランス植民地支配下の地方行政村として、いわば上から編成された新村 A' の「自治」⁽⁴⁸⁾を担った自作農民である。しかし同行政村を構成する複数の $Ap A'$ には、運河沿いに広大な払下げ地が含まれ、それらはサイゴンやデルタの地方都市あるいはパリにすむ不在大地主の所有地である。不在地主は所有地に中間管理者を住まわせ、この中間管理者たちがデルタのあちこちから集まってきた無産者に土地を貸し与え、地主に代わって小作経営を担ったの

房総の歴史と下総台地の開拓：メコンデルタ開拓との比較から（3）

である。

その結果、ここでの開拓社会は、数本の運河が交錯した地点に小さな中央市場と役所を配置し、その周辺に徴税その他の自治に責任を負う自作農民たちが居住する一方で、デルタの奥地に広がる運河沿いには点々と無産の小作農家が並ぶ、凝集力の脆弱な「行政村」として成立していった。メコンデルタ西部の氾濫原のなかに誕生したこのような開拓社会の本質は、先述の通り植民地経営を支える輸出米の生産という経済活動にあった。しかしながら、ベトナム人が集団としての拠点村を創り、そこから絶えずフロンティアに向かって人を押し出し、彼らの生業の場を広げていくという19世紀からの開拓過程は継続していた。ただ下総台地の武州集落の事例と異なるのは、先住民族が次第に土地から排除されていった点にあるだろう。

次稿ではこれまで充分には触れなかった土地所有をめぐる諸問題を考察した上で、「開拓」をテーマに比較したそれぞれの地域の歴史的固有性に関する議論を締めくくりにしたい。

（未完）

<注>

（1）富里村史編さん委員会編、『富里村史 通史編』（以下村史と略）1981年、704ページ。

（2）神田文人「成田市内およびその周辺の開墾地と陸軍の『偵察録』」『環境情報研究』第7号（1999年）所収、97ページ。

（3）村史 704 ページ。

（4）村史 705 - 707 ページの表：明治四年五月十倉開墾会社農舎人員帳より抽出。

（5）開拓者の嘆願書の中に、そのような記述が見られる。後に三里塚に暮らした文学者水野葉舟が高村光

太郎夫人智恵子を偲んで残した文章にも、山栗の実の話が出てくる（北川太一、山田清吉編『光太郎と葉舟』葉舟会刊行、1989年、258 - 263 ページ）。

（6）村史 705 ページ：開拓農舎図面飯沼実家蔵。

（7）埼玉移民は十倉・八街以外にも、入間郡岸町（現川越市）から豊四季の開墾に従事した人々などが存在したようである（『図説 千葉県の歴史』河出書房、1989年、216 ページ）。

（8）白浜兵三「佐倉牧跡における集落の形成過程」『千葉大学教育学部研究紀要』Vol. 3, 1954年, 35 ページ。しかし、村史の記述と若干食い違う点がある。村史に依れば、栗原貫三が品川県役所の下総の開墾者募集の布令をみたのがきっかけで、さっそく高松村の旅籠屋で十倉開墾会社手代福田半兵衛に面会し、農民 20 戸のため一戸当たり 5 町歩の土地を割り渡す願いを聞き入れられた、としている（村史、708 ページ）。

（9）同上書、709 ページ

（10）拙稿「房総の歴史と下総台地の開拓：メコンデルタ開拓との比較から（2）」『環境情報研究』No.11、2003 年（以下第 2 論文と略）、66 ページ。

（11）それ以外の子供、老人には「扶持渡米」のみ貸し出された（村史 713 ページ）。

（12）開墾会社は 1872 年 5 月に解散。

（13）下総は少雨地帯である。台地上は飲料水の確保に井戸の掘削が不可欠だった。畑作は天水に頼るのみの状態だったと思われる。現在は畑地でスクリンプラー灌水が行われている〔写真 1〕。千葉大学清水馨八郎氏による四街道の地誌（1951 年 3 月刊）によれば、一般に台地は地表から地下水面までがかなり深く、人間の居住に不適地であった。下総台地と同じ武蔵野台地が長く開拓されなかったのは、地下水が 20 ～ 30m も掘らなければ水が得られなかったことによる。しかし、武蔵野台地と比べれば、下総台地の場合は、2 ～ 3 m で地下水位に届く所もある。台地の縁辺に自噴、湧泉もある。『四街道町史』第 1 部・通史編、1975 年、9 ページ。〔写真 2〕参照。

（14）村史 718 ページ。

- (15) 同上 719 ページ。
- (16) 同上 720 ページ。
- (17) 同上 721 ページ表から。
- (18) 同上、721 ページ。現在も八街近郊には茶畑をみることができる。
- (19) 拙稿「房総の歴史と下総台地の開拓：メコンデルタ開拓との比較から(1)」『環境情報研究』、No. 8、2000 年（以下第一論文と略）。
- (20) Nguyen Huu Chiem, “Geo-Pedological Study of the Mekong Delta,” 『東南アジア研究』京都大学東南アジア研究センター、第 31 巻、2 号、1993 年、また Vo - Tong Xuan, Shigeo Matsui eds., *Development of Farming Systems in the Mekong Delta of Vietnam*, Ho Chi Minh, 1998, 参照。
- (21) メコンデルタの東都 My Tho と西都 Can Tho の中間地帯を含むこの地域を、新デルタと呼ぶ場合もある。ベトナムではメコン本流(ベトナム語では前江 Tien Giang) より以西の土地は、独特の感情を込めて Mien Tay (西部という意味) と呼ばれる。そこには、ベトナム人にとって、田舎の、豊饒の自然に満ちた新天地というイメージ、自由への憧れの気持ちが込められているように思われる。仏領期のメコンデルタ社会経済史研究で世界的に有名なブロシュは、この Mien Tay をさらにバサック川(メコン河の西の分流、ベトナム語では後江 Hau Giang) 以東の Cissbassac と、以西の Transbassac とに区別している(Pierre Brocheux, *The Mekong Delta: Ecology, Economy, and Revolution, 1860 - 1960*, University of Wisconsin - Madison, 1995, p. 3)。
- (22) 石井米雄氏による農学的適応、工学的適応の概念。
- (23) 拙稿「メコン・デルタの開発」池端雪浦編著『変わる東南アジア史像』山川出版社、2001 年所収、参照。
- (24) 天下井 恵「開墾局仮役所及び初富会社(授産方)一初富入植者への支配について」『鎌ヶ谷市史研究』、No. 3、1990、22 - 23 ページ。また村史 679 ページ。
- (25) 彼は明治の初め、日本政府に招かれてヨーロッパ法を講義するために来日し、詳細な見聞記を残した(長妻廣至「下総牧と地租改正」『図説千葉県の歴史』河出書房、1989 年、216 ページ)。
- (26) この問題は、拙稿「インドシナ」加納啓良編『岩波講座 東南アジア史(6)：植民地経営の繁栄と凋落』(2001 年)の所収論文の中で展開している。
- (27) Indochine, Direction des services économique, *Bulletin Economique de L' Indochine*, 1909, pp.565 - 566.
- (28) 白浜兵三「佐倉牧跡における集落の形成過程」『千葉大学教育学部研究紀要』、Vol. 3、1954、33 ページ。
- (29) 同上。
- (30) 拙稿、第 2 論文、67 - 69 ページ。
- (31) 白浜論文 40 ページ。
- (32) 白浜論文 41 ページ。
- (33) 白浜論文 42 ページ。
- (34) 高田洋子・ピエール・ブロシュ「広低地氾濫原の開拓史—植民地期トランスバサックにおける運河社会の成立—」『東南アジア研究』39 巻 1 号、2001 年参照。
- (35) 白浜は、これに加えて開墾会社と入植民との間でその後に発生する開拓地の所有権をめぐる係争において、武州地区の住民が見せた団結性にも注目している。この問題については次稿で土地係争問題を論じる際に詳しくみることにしたい。
- (36) 白浜論文、44 ページ。筆者は十倉の武州地区を臨地調査した際に、区有墓地の掲示板の文言から、この地区の人々が強い自治力を現在も維持し続けていることを察することができた。当地区のほぼ中央に立地した武州墓地に、管理委員会が明示した使用規則には、墓碑の建築・改修の管理、第三者使用の許可制、墓地埋葬供物の処理規則、墓地内への車の乗り入れ禁止などが事細かに定められ、それらの遵守を求める内容が表されていたからだ。
- (37) 同 44 ページ。
- (38) 『日本歴史地名体系 11 埼玉県の地名』平凡社、

房総の歴史と下総台地の開拓：メコンデルタ開拓との比較から（3）

1993、341 ページ。同資料によれば、1889 年の市町村制施行による町村名一覧では、上富村は三芳村に、中富村と下富村は富岡村に再編されている。同 1169 ページ。

(39) 同上、340 ～ 341 ページ。

(40) M.E. Deschaseaux, “Note sur les anciens Don Di-en annamites dans la Basse – Cochinchine,” *Excursions et Reconnaissances*, Tome 14, No.13, pp.133 – 140 参照。先住民族クメール人とベトナム人の関係史を、チャヴィン省の一村落をとりあげて、その臨地調査と伝説史料を用いて明らかにしたものに、拙稿「海岸複合地形における砂丘上村落の農業開拓」『東南アジア研究』39 巻 1 号、2001 年がある。

(41) Ibid., p.137.

(42) Landes, “La Commune annamite,” *Excursions et reconnaissances*, Tome 2, 1880 – 81, pp.101 – 2. 全土地は皇帝のものとされたから、未耕地の開墾者は土地台帳上の「所有者」となるが、皇帝に対して納税の義務を負った。

(43) ホーチミン市にあるベトナム国家公文書保存センターⅡ所蔵の文書 IA 17, Elections coloniales au titre indigène 関連の史料から判断。植民地時代の地方行政機構は、Province（省 Tinh）－ Canton（総 Tong）－ Village（社 Xa）。そして最末端行政村 Xa の下位レベルとして Hameau（邑 Ap）。

(44) 拙稿「20 世紀初頭のメコン・デルタにおける国有地払下げと水田開発」『東南アジア研究』（京大東南アジア研究センター）、第 22 巻 3 号、1984 年。

(45) Tran Thi Thu Luong, *Che do so huu va canh tac ruong dat o Nam bo nua dau the ky XIX* [19 世紀前半の南部における土地所有制度と開拓], Nha Xuat ban Thanh pho Ho Chi Minh, 1994.

(46) Landes, op.cit., p.102、あるいは 19 世紀グエン朝政府の地簿研究の第一人者 Nguyen Dinh Dau は地簿から見た村落名の分析を行っている (N.D.Dau, *Tong Ket Nghien Cuu Dia Ba, Nam Ky Luc Tinh* [地簿の統計的研究：南圻六省], Ho Chi Minh, 1994, pp.311 – 313)。

(47) 拙稿、前掲論文、p.254。

(48) 1904 年の村落統治令によって、南部の村は一律に自治体としての徴税、治安、その他の諸制度を規定された。当局に対して住民把握、命令伝達、徴税、徴兵などの任務を負うことになったのである (Ernest Outrey, *Nouveau recueil de legislation cantonale et communale, Annamite de Cochinchine*, Saigon, 1913, Chapitre II, pp.20 – 30)。

ABSTRACT

A History of the Boso Peninsula and the Opening up of the Shimousa Plateau : A Comparative View with the Clearing of the Mekong Delta (Part Three)

Yoko TAKADA

In the third part of an article, the writer focuses to make clear the opening up of Tokura village (十倉村) in Tomisato (富里) at the beginning of the Meiji period. The aim of this part is to understand the development of Shimousa Plateau more profoundly comparing with that of the Mekong delta under the French colonial state domination.

Tokura village was born in 1872 after the Meiji government settled this area with proletariats or unemployed persons from the old Edo. One hundred two households that contained three hundreds forty seven "farmers" settled there in 1871, but in a few years 90 % of them dispersed.

In contrast the farmers coming from Saitama immigrated in the same area, and thirty eight households, one hundred twenty persons succeeded to settle down there. They and the neighbors of Tokura were the actual pioneers to clear lands for cultivation.

The writer gives more informations on the settlers from Saitama. Their home village, Mitomi (三富), Minamiiriso-district (南入曽郡) in the north-east Musashino Plateau (武蔵野台地), was one of the famous clearing land (畑作新田) which was developed in Edo period under the direction of a vassal of the head of Kawagoe-Han (川越藩). The writer details the settlers in Tokura cleared the land to cut into the same rectangular farms as their ancestors had done in their native village. They also introduced there to plant tea tree, sugar cane, and mulberry that had been cultivated in the native village. The immigrants from Saitama and the neighbors also maintained their original forms of hamlet and the relationships with their mother villages. The reason of their successes was that they could utilize their traditions to develop the Shimousa plateau.

After giving a brief summary of the development of rice cultivation in the west Mekong delta at the beginning of the twentieth century, the writer points out some common characteristics of the development between them. At first they were planned by the new governments that challenged to clear up the vast area that had serious troubles to cultivate the soil. The second, the purpose of clearing land was caused by the external factor rather than the internal incentives of immigrants. The third the government efforts failed to relocate landless people to the wastelands, and also to help their lives in the settlement place. (To be continued).